

南遊紀行 ： 雑録

著者	想峰生
雑誌名	龍南會雑誌
巻	7 7
ページ	6 5 - 8 5
発行年	1900-02-28
その他の言語のタイトル	南遊紀行 ： 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/5491

南遊紀行

想 峰 生

題して南遊紀行と云ふ雖ども、盡く旅中の事項を記載するに非ず。其前後に亘り、全く旅行に關係なきこと有り。或は余が性僻たる我儘により、氣に合ふ時は書し、氣に合はぬ時は書せず、一日はぬかし、半日は略する等のこと少からず。云はゞ旅中及び其前後に於ける雜感隨筆なり。殊に文体の如き千種万様、亂雜云ふ可からず。

* * * * *

我が兄

昨年の冬は、單騎九州の北部を遠征し、日を重ぬること十五日、道を行くこと百二十里、今又九州南部旅行を企つ、さなきだに家計豐ならざる兄に對え、多額の學費をさへ要しつゝ有るに、剩さへ豫想外の旅行費を請求まて之を苦めんは、余が殆んど忍びざる所なり。然れども、宿年の企望たりし薩南旅行を止むるは、更に余が忍びざる所。於此乎書を家兄に送つて、余が胸臆を具陳せしは、過ぎつ十四五日のことなりまが、爾來翹首快章の到ることを待つこと連日なれども、更に其報を得ず。十二月二十三日第一學期の試験は、茲日十一時を以て全く結了ま、爾後十五日の太平を歌ひつ、寮に飯れば、机上に横はる一封の書有るを見る。是乃ち兄の送りし所なり。封を開く間も、尙は思はるゝは其内容の如何なり。何となれば、此瞬間は、實に余をまて薩南の天地に仰俯ま、未知の山川を跋涉するを得せしむるか、將た又此寮内に鬱居して、不愉快なる新年を迎へざる可からざらまむるかを決定するの時なればなり。一喜一憂の間に封を開けば先づ余が心を垂せまめたるものは、黃字の一葉、兄が同意を代表する爲替手形にて有りつるなり。次に之に沿へる手紙を取り伸

べて、いそがわしく一讀せ、又再び心靜かに讀み下せば、例の筆少き兄の手紙に、左の如き一節有り。曰く。

（前略）歲末に際し、金融豐ならず。御旅行もあまり香氣過きると存じ候得共、折角の思立、且つは御持論の遂行も望ましき方にて、左の通り送金仕候故、云々。

と余は三四回殆んど涙を以て此節を繰り返へせり。抑も、余は生れて二歳に迄て孤となり四歳にして母の手を離れて叔父叔母の家に預けられ、彼處に一年、此處に二年、寄る邊渚に一夜を頼む浮草の如く、引くてさすての有るかまゝに、人々の惠の露に養はれたりき。兄は隣村の郷先生に依り、四人の姉も亦皆夫々親戚に預けられ、母は其生家に歸り、我家は全く廢家の如く、後見職たる二叔父の占住する所となれり。余か十三歳の春、家は再び家兄の恢復する所となり、一握の財産とてはなけれども、尚ほ一母一兄四姉相集まりて、雲曇華の花面白く咲き出て、再び愉快なる家庭を組織することを得たり。余は此年甫めて中學に入りて、寄宿したれば、此の樂き家庭の團樂にも、唯歸省の折々の外は加はること能はざりき。爾來年を経ること八年、姉は滞りなく隣村に嫁え、嫂は二子を擧げて、我が母も亦既に老たり。此八年の長星霜恰も一日の如く兄の家計は嘗て豐なりしことなきも、余が月々の費用は、嘗て期を後れたることなかりき。彼は身自から不幸悲慘の境遇を経験せるが故に、彼が余に對するの同情は非常なる慈愛心となり、余をして孤兒の不幸を感せざらめんとは、彼が天に仰き地に俯きて誓ひし所なり。嘗て余に告げて曰く、「家計上の事、唯兄が方寸の内に在れば、更に意に介することなく、専心學を勵みて、一步たにも人に後れざるを勉む可し、余は未來の家計、子供の養育を以て、汝に托するを願はず。唯た汝が、一日も速に成業まで父母の志に沿

ひ、家名を顯はさんことを希ふのみ、余は世人に、自から十分の教育を受けること能はざるのみならず、其弟迄も彼の如きなんぢ云ひて指笑されんことの口惜きなり。是故に余が汝を教育するは、父とて、兄として、余が半生の希望を放棄して勸むる所なり」と、蓋し、彼幼に於て材氣有り。郷に在つては郷校を歴し。中學に在つては中學を歴し。未だ嘗て人後に落ちしことなかりしと云ふ。然れども、家計の紊亂と眼病とは、遂に彼をして半途退學するの止むを得ざるに至らざめ、今は齷齪とて一小郡吏に安んず、素より彼が龍蛇の資、決して之を以て満足す可きに非ず。必ずや身を政海に投じ、或は企業を創立し、以て成敗を一時に決するの概有る可しと雖も、一朝失敗の地に墮る時は、彼か半生の事業と爲したる、余か教育を中止するの止むを得ざるを恐るゝなり。是故に彼は心にもなき一小官吏を以て自から安じ、嘗て雄飛高蹈を試みて、萬一の僥倖を爭ふこと能はず、遇親戚の余を養ふて教育せんとするもの有るども、彼は寧ろ罵つて人職を齷食せんとす云ふ。蓋し、彼の希望は、獨力を以て余を教育せ、而も、夫の白石の所謂小蛇の害を以て、余を傷くるを欲せずと爲すなり。嗚呼彼、窮鬼の重圍に在り、不平不遇の逆境に在りながら、嘗て之を苦とせざるものは、一條の光明、一朵の希望、能く彼を慰むるもの有ればなり。彼は余を以て光明となし、余か成功を以て希望となし、余を以て嚴正謹勉不撓敢爲の者と確信せ、余か成効の日有るを信すること、恰も藏物を出すか如しと爲す、是故に余か爲には、在を盡し力を致して惜しむ所なくまた更に疑ふ所なき、以爲らく彼か要求する所のものは、必ず其止むを得ざるに出つと、剩さへ時々余に勸むるに肉を食ひ、乳汁を飲んで、體を養ふの必要を以てせ、或は金を稟んで他人に指斥せらるゝこと勿れと云ふ。彼は身目から廐屋に棲み、糟糠を嘗めながら、而も余をして十分の滋養と攝生を爲さ

あ、地方富豪の子弟たる、我が學友に對しても、俯仰一步も遜色なからまけんことを願へり。嗚呼、誰の父兄か其子弟を愛せざらん、誰の父兄か其子弟を信ぜざらん、然れども眞心の底を叩きて、余を愛すること彼の如く、余を信すること彼の如きもの、果して幾人か有る。彼は余か成効を希望すると、其の目的の成達を希望するが如く、余か樂むを見て、自から樂むよりも樂めり彼か圓滿にして、情誼深き家庭の感化は、既に二人の子をさへ設けたる嫂すらも余を敬愛すること實弟よりも甚しく、去夏の歸省の際の如きも、尙余か爲に活計不相應の衣服を裁ち、膳食を整へ、余を以て共同の和樂を害すると云ひて泣かしめたる程なり。

彼か心底よりの同情心と彼か心底よりの慈愛心とは、遂に彼の心眼を盲目にし、余を以て此上もなき末頼母數者と爲すに至れり。嗚呼、彼を以て余か現在の境遇遊惰學を勉めず、狷介人に客れられざるの事實を知らまひるもの有らば、彼の落膽、彼の失望、果て何奈そや、嗚呼、唯さへも兄に對する義務の萬分を盡さず、慚愧汗背に耐へざるもの有るを、如何なれば斯かる不要の旅行費をさへ請求きて、兄を苦めざる可からざるか。節期年末の際、債主は陸續鎖を爲えて我門に迫る今日此頃、此の今回の要求は、必ずや彼に對する意外の大打撃なりとや疑なま。然らずんば、家内の苦を以て、余に對する唯一の秘密とせる彼、焉んそ一言たりども之を漏らすことあらんや。嗚呼我何等の厚顔か、兄か嚙肉削骨の苦を以て工面したる、此貴重の金圓を以て、如何なれば恬視悠遊、旅行の費に費すことを得ん。懷ひ來れば涙汗交も到り、金錢の有難さも亦、平生に十倍するの感有り。一時は此儘送り返さんかと迄思ひつめたり。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

稼堂先生

稼堂先生黒本教授、冠を掛けて故郷越前に歸らんとす。先生本校に在ると凡そ七年、國語作文の教師として、一意子弟を導き、側ら舎監とまで、學寮を監督すること亦暮年、未だ以て効績見るに足る可き無しと雖ども、其の苦心盡力せし所、少と爲さず。此に於て、龍南會一同、午後二時より、錦山神社に集合きて、紀念の一影を止めんとす。余も亦桃江赤髯君等と相携へて行き、歸途少く雨降るを以て、平田、小磯君等と、雨宿を兼ねて富田兄弟の宿を訪ふ。戸次吉田兩君先づ在り。仍て大に茶話會を開く、茶菓既に盡くると雖も、雨尚ほ止まず遂に褥を伸へて一睡を食はる。覺むれば即ち已に黄昏、余驚いて蹶起すれば、二三子も亦愕然とまで覺め呆然として相視て語なし。余大に笑ふ。三氏亦啞然として笑ふ。富田氏は隣室に在り、燈を點し火を作つて待つ。仍て又談笑暫にまで別を告げて出づ。戸次小磯兩氏は途にきて別れ、殘る所は唯だ平田氏のみ。余曰く『夕飯は遂に喫せざるか』平田君曰く『焉んぞ略す可けんや。然れども、今學校に歸るも、時既に遅し請ふ牛肉屋に上ばらん』余曰く『日暮れて途遠し請ふ蕎麥屋を以て之に代へん』と。即ち丸萬に入り、酒と蕎麥とを命じ、且つ飲み且つ談し、且つ食ひ且つ笑ふ半時、菊池田中行徳の三氏突然我か室を襲ふ、曰く、『彼の金剛杖に誘はれたり』と、蓋し菊池君田中君共に明朝を以て鹿兒嶋旅行の途に登らんとするもの、行徳氏は則ち之を送るもの、三人相會して此に送別の微蕙を開かんとす。仍て大に鹿兒嶋の豫想談に移る。談甚だ熟して、一つも得る所なし。蓋し五人皆毫も鹿兒嶋の知識を有ぜさればなり。平田君曰く、我豈此壯行を祝せざらんやと、丸萬を出て、鯛とを購ひ、携へて學校に歸り、大に有志者を集めて送別の蕙を張る。茶は未だ温まらざるに飲み、鯛は未だ焼けざるに食ひ、

更漏二時を報し、鷄鳴亦近からんとするに及んで散會す。

旅 情

二十四日、

朝は雜誌の發送に費し、正午より。廣町に出て、一個の古帽子、一個の古ギンチャク、及び一個の草袋を求め、歸途武藤先生を新屋敷水道端に訪ふ、蓋前約の薩隅日地誌纂考を借らんとするなり。門前に至れば數輛の荷車は、書籍戸棚等を滿載して道路に塞がり、往來も出來ぬ有様なり、からうじて玄間に至れば、令夫人取り紛れたる貌にて迎へらる、曰く『今日子飼橋の邊に移轉せんとぞ、家君は既に新宅に在り』と、由て歩を反して此處に來れば、先生悄然とぞて玄關にイむ、此家亦器具狼藉、殆んど座を容るゝ間なければなり。先生莞爾として問ふて曰く『異日大言せよ足下の旅行は奈何。』余曰く『止めしに非ざるなり。前約を以て先生を煩はさんとするなり』と、先生笑つて奥に入り、出て來らざること暫時、憂然堂然の音相續て至るものは、蓋し書を充棟の庫中に索めらるゝ音ならんか、漸くにぞて先生書を携へて來る。曰く、此二冊子以て南蕃の地理歴史を概す可しと、余欣然として辭し歸る。當夜殘寮生徒四十餘名、相計つて茶話會を開く。雜誌名指に夜更けて、十時に散會し、小使室に至れば、鹿兒嶋の人、上床、山口永山の三氏、亦相續て來る、余問ふて曰く、君等は何故に歸らざるか。三子相視て語なま、即ち相共に爐に對て坐す。上床氏快話好く語り、永山氏怡々能く笑ふ、獨り山口氏は、一隅に默座て更に言はず。談は故郷に移り、上床氏鹿兒島を語れば、我亦唐津を談す、なては大言となり、壯語となり、終に懷舊談となる。余曰く、吾始め

て此地に来るや、風俗人情、盡く故郷と異なり、山川の景色も亦故郷の如くならず、加之知己朋友の互に懷戀を開く可きもの無く、交る所皆方言を異にえ、寮友は三百餘あれども、尙ほ寂寥を感ぜたりき。懷ふに君等亦一時此邊の境涯を経過せし者、今既に多少の知己朋友を得るなきに在らざらんと、共に袂を列ねて此地に來りて郷友が、欣然歸省して歳末を父母の膝下に暮らし、來新天地を弟妹と共に、故郷の山景色を見て迎へんとするに當り、獨り寂寞なる學寮の寢室に蟄居呻吟せざる可からずと思はれ、果して如何の感か有る」と、一座は暫時水を打たるが如く靜なりしが、談は最も寡言なる山口氏の口に由て續けられたり。曰く『今朝四時吉國氏等、二三子相率ゐて故郷に歸るとて、余を起てせし時は、一種異常なる感に打たれ、唯だ返辭したるのみにて、見送りもせず、衾を被りて臥せ居たり』と、輕快なる永山氏は、眞面目けに『余も亦然なりし』と云ひ愉快なる上床氏は『見送りて後は、再び寢に就きたれども、遂に眠りもせずして、夜を明かしたり』と云ふ。余更に語を次いで曰く『百里異郷の空に在り、同き門出を唄ひ來し郷友が、嘻しげに歸省するを見送る時は、羈旅に慣れたる吾等すら、尙且つ物悲しき心地するに、況んや兄等始めて兩親の膝下を離れたるもの、豈多少の望郷嘆なからんや。然れども想へ、今當寮に留まつて、二週間の閑暇を消さんには、之をまさらはすに足る可き遊戲、乃至飲食の費を要え、且つ又惡習慣、惡遊戲を覺ゆるに至るの恐有り。今君、徒歩山川を跋涉え、木賃宿に泊り、握り飯を喰つて故郷に歸る時は、一つは以て體を鍊るに好し。一は以て未踏の山水を觀察するに好え。況んや故郷の山、故郷の父母兄弟姉妹に對するの愉快有るをや。其間に得る所の利益決して僅少にあらざる可し。而て其要する所の旅費も亦決して、此處に留居するの費よりも多らず若し費用の準備なくんば、我暫時く之を計らん。

余は常に此主義を以て旅行するもの、請ふ兄等と相携へて共に旅途に上づることを得んか。無言なる山口氏は熱心に歸郷の勸議を持ち出して永山氏に計る。永山は肯いて更に答へず。獨り上床氏が思ひ切つたる一聲、『出發の際來年の夏迄はと明言せしに非ずや』との一言は、遂に本意なげにも原案の取消を宣告せたるもの。暫時の間は無言の靜穩、再び一座を支配せしが、二三の醉漢、高聲に怒鳴りつゝ入り來るに及んで、終に各別を告げて散せり。

旅友太田貢

是より先、友人太田貢君、余と行を同うせんことを請ふ、氏軀倭小にまて肥滿、白面黑髮、厚唇俊鼻の人、其抗辨人を憚らざるの氣、諷刺人を怒らしめざるの臉滑稽人を愚にするの巧、嘘戯人をまて抱腹絶倒せまむるの妙、怡々どまて満顔常に笑を含むの快活、其の天真爛漫にまて包まず匿さざる資性、其の眞摯義務を奉するの精神は、余か深く氏を愛する所、是實に余か好侶伴なり。然れども其狀貌到底余と雁行して長途の日程を歩行するに堪へざるを察し、氏に辭すること再三、氏反覆請ふて止まず、曰く『夫の船に乗り車に駕する紳士旅行は、余か最も喜はざる所、平々凡々たる八里の日程を踏んで、氣息奄々たる軟弱子の旅行も、亦余か共に語るを欲せざる所、今冬薩隅に遊ぶもの焉んを獨り兄に限らん。然れども反覆切に兄に伴せんとするものは、其の能はざる所を試みんと欲するが故なり。余に危ふむ所のものは、余か最も美望する所、若し中途にして斃るゝこと有らば、斷然袂を振つて顧みること勿れ』と、意氣甚た壯、仍て遂に同行を約またりき。此を以て氏先刻より余か座右に在りたれば、是より直に明朝出發の準備に取り掛り、四時の起床を約まつゝ、八田千

町か釜中にもぐり込みしは、既に十二時過にて有りき。

發 足

二十五日

四時起床、厚唇生を起して委員室に入れば、振目なき小使の志、いと温く炎々とて炭火爐中に溢れたり。仍て衣を更へ、装を整へ、洋服外套は例の如く、厚唇生は甲掛を以て草鞋を釣り、余は篋の如き四角なる古靴を釣る。厚唇生か肩に掛る所のは、小學生徒用の『ドンゴロス』の袋なり。余が下ぐる所の物は巨大なる草袋なり。厚唇生は寒襖樹の小『ステッキ』を携へ、余は例の金剛杖に似たる櫛櫛の巨杖を提げ、沈々たる深夜の暗を逐ふて、絞門を出つ、想峰生戯れて曰く『足下の風姿はボンチ繪中の紳商に似たり』と、厚唇生笑つて曰く『足下の狀貌は餓鬼の夜行に似たり』と、想峰屈せずて曰く『然らば紳商、余は足下を縛えつゝ行くものか』厚唇生黙して答へず。少時有つて又問ふて曰く『何時ぞや』答て曰く『知らざるなり』と、又問ふて曰く『君時計を持たざるか』余笑つて曰く『君も亦之を持たざるか、持つて而して是を余に問ふは不可なり』と、彼遂に止むを得ず、燈を擲て時を驗す。曰く『四時半なり。一番の氣車は何時ぞや』曰く『四時四十四分』此時我等僅に九本寺の門前に在り。池田を去ること尙二十餘町、是に於て厚唇生驚いて曰く、『噫、馴馬も亦遂に及はざるなり。然れども奔馳之に向は、尙は萬一を僥倖するを得んと想峰生冷然とて應せず。曰く『後るものは遂に後れ間に合ふものは遂に間に合ふ。數の定まる所、終に之を奈如ともする能はざるなり。馳するも愚、馳せざるも愚、余は寧ろ後者を撰ばんと厚唇生聲を勵まして曰く『咄是人命なるのみ』

馳○す○と○馳○せ○さ○る○と○、何○れ○か○間○に○合○ふ○に○庶○幾○す○可○き○か○。夫○の○全○力○を○懸○け○て○之○に○當○り○、而○も○機○逸○し○事○去○ら○ば○乃○ち○始○め○て○天○命○と○云○ふ○可○し○。閑○如○力○を○用○ひ○す○ま○て○、機○既○に○逸○せ○り○と○云○ふ○は○、機○を○知○ら○さ○る○も○の○。唯○請○ふ○、全○力○を○盡○す○有○る○の○み○と○、一○言○は○一○言○よ○り○激○す○。想○峯○生○笑○つ○て○曰○く『馳○せん○哉』即○ち○叱○咤○し○て○市○中○を○奔○る○。門○犬○吠○え○查○公○叱○す○る○と○も○、遂○に○之○を○顧○み○る○の○暇○な○く○、池○田○に○着○き○し○は○四○時○五○十○分○、恰○も○好○し○、瀟○笛○一○聲○雷○の○如○く○。飛○入○す○る○の○時○な○り○き○、切○符○を○買○ふ○て○之○に○乗○す○。

瀟 車 道

車○室○は○ひろ○く○た○る○百○人○乗○な○れ○と○も○、寒○天○未○明○の○早○朝○と○て○、乗○客○と○て○は○、背○中○合○は○せ○に○腰○掛○け○た○る○、黑○前○垂○に○黑○筒○袖○を○着○え○、『フ○ラ○ン○チ○ル』の○襟○卷○き○し○て○、懷○手○し○た○る○番○頭○態○の○者○、及○び○遙○向○ふ○の○隅○に○、縞○毛○布○を○肩○に○掛○け○垢○染○み○た○る○手○拭○に○は○う○か○ふ○り○ま○た○る○、田○舎○翁○の○二○人○の○み○。厚○唇○生○は○、仄○暗○き○電○氣○燈○の○下○に○、草○鞋○の○緒○を○ま○め○、外○套○の○被○帽○を○被○り○、燧○を○き○つ○て○煙○草○に○點○火○し○、之○を○口○に○く○は○へ○な○が○ら○、遽○は○ま○く○手○帳○を○出○ま○て○、二○三○の○手○控○を○な○ま○、再○ひ○之○を○衣○囊○に○收○め○、携○へ○た○り○ま○布○呂○敷○包○を○解○き○て○、麵○麴○を○出○ま○始○め○た○り○。余○は○夫○れ○と○さ○ど○り○、小○刀○を○與○ふ○れ○ば○。生○は○半○ば○凍○へ○た○る○手○を○以○て○、覺○束○な○く○も○之○を○切○り○始○め○た○り○。余○は○此○間○、窓○戸○を○開○き○て○眺○む○れ○ど○も○、朦○朧○と○ま○て○、崑○頭○二○三○の○星○を○戴○く○、金○峯○山○の○他○は○、遠○近○の○も○の○、有○耶○無○耶○、更○に○見○え○ず○。唯○曉○風○面○を○吹○い○て○、鬢○髮○の○悚○た○る○有○る○の○み○。頃○て○瀟○車○は○一○聲○の○汽○笛○、四○山○の○眠○を○覺○ま○ま○つ○、停○止○し○た○り○。是○即○ち○春○日○停○車○場○。厚○唇○生○は○既○に○麵○麴○を○割○て○寸○斷○ま○、砂○糖○と○味○柑○と○を○出○し○て○余○を○待○つ○。仍○て○互○に○相○談○笑○し○て○之○を○喰○ふ○こ○と○少○時○、腹○未○た○飽○か○ず○と○雖○ど○も○口○冷○え○舌○渴○し○て○食○は○る○と○能○は○ず○。時○に○疾○呼○ま○て○窓○下○を○過○く○る○も○の○有○り○。曰○く『黑○死○病○検○

疫の爲、四十分休車』と、前きの番頭態の男は、默然ときて車を下り。余は草袋を解きて、新体詩集を讀む。頃て檢疫掛と記せる提灯を携へたる二人の紳士は、車掌に誘はれて入り來り、余が脇を摩えて無言に通過せし座に復したる番頭態の男に向ひ、其の何處より乗車せしかを尋ねつつ、再び無言にて室を出て去れり。暫時にして、一輪の振鈴は暗を破ふりて鳴れども、乗客更に來らず。瀛車は再び一聲の鳴笛と共に、瞬一瞬の加速度を以て動き始めたり。此時東山景色少しく赤く、日出の刻遠からざるを示し、溝梁の薄氷も亦頗る面白し。瀛車は飛ぶが如く、川尻に到り、宇土に到り、松橋に着けば、恰も三角支線の開通式を行ひたる翌日にきて、無賃乗車を許さたる頃なれば、數百の老少、構内に雜鬧ををれり。此時朝暾亦蘇山の峽軸を出で、淡烟地に飄きて寒鴉此間を縫ひ、風致鮮麗にして、眺望繪の如く、快云ふ可からず。瀛車は再び進みて、小川驛に到り、有佐驛を過ぎ、終に八代に達す。

天 草 灘

八代は九州鐵道の南端、戸數三千余の小都會、鎮西將軍を祭る所、即ち車を下りて停車場を出で、左折して町に入り、電線に沿ふて右折す。厚唇生は、と有る小間物屋を叩きて足袋を買ひ、再び直進して、更に左折して、小石階を攀ち、球磨川の堤に上れば、川面の水煙雲を起こして騰はり、宛も湯を流せるか如し。石階を下りて石多き川原を横さり、浮橋を渡れば、數十頃の平原有り、是球磨川川口の三角洲の一にきて麥嶋と云ふ。之を横されは再び球磨川に出て、橋を渡つて一直線に進行し、山脈海に迫まり、怒濤岩を噛む天草海岸に出づ。嗚呼是仰けは則ち千尋の崖俯すれば則ち萬頃

の瀟々、天草群島の峻嶮なる山貌はまばり上げたるが如く、其沿岸銀の如きは、石灰層にして、白波の岩に激するかと疑はれ、三角半嶋は巨人の如く、温泉岳巔乎として、遙かに其左肩より覗ぞく。時に一陣の狂嵐、左方より襲ひ來り、清香馥郁として鼻を撲つを覺ゆ。驚いて之を見れば、打ちよろほひま翼屋を擁せる數十株の梅樹、今を盛りと咲き亂れたり。嗚呼何等の好風致ぞや。

日 奈 久

行くこと二里にして日奈久に着く。日奈久は戸數數百戸、一寸またる一筋町、友人野村貞の郷なり。由て之を訪ふ。一少年有り、出て來りて曰く『兄君未だ歸らず』仍て落膽一番、直行まて日奈久温泉を見る。庭園清潔、屋形風流にして而も新築、既に業を開くと尋年なりと云ふ。庭内を一廻まて町に出て、海に沿ふて行くこと四五町、岩嶮にして奇、眺望最も面白き處に一軒の茶店有り。入つて飯を命て休憩す、戸を排して浦を望めば、岩壁削るが如く、清波激瀾とまて眼下に寄す。景最も面白。此屋の主人は、四十前後の、色白く、眉こゆき少まゝ厭味有る、小形の男にして、病床に臥ま、紅顔已に萎まんとする三十四五の婦獨り破衣亂髪にまて、甲斐くまゝ働けり。余婦を呼て問ふて曰く『あるは怒濤、岩に激まて万斛の玉を碎く浦の眺望、あるは千頃の海、平穩鏡の如く、天草諸嶋を雙眸の間に見、朝には日夕には月金波薫るの狀、銀蛇舞ふの樣、眺め盡させぬ此浦曲に在りて、尙ほ憂しと思ふ時』ありや。婦跪つて答へて曰く『浦の景、嶋の容、人は千金の眺有り云へども、目狎れ心飽まては、唯た濤聲の喧噪、眠を妨くるを覺ゆるのみ』と、厚唇生啞然とまて笑ひ、余も亦笑ふ。少頃あつて出來合の甘薯飯に、一尾の鰯魚を載せたる、一皿の大根にまめを添へ

たる膳を持ち來れり。二人膝を交えて、連りに數杯を食ばり、休息又少時、將に出てんとするに當りて、價を問へは甚た貴し、厚唇生罵りて止まず。余も亦問ふて曰く『寒天旅人少うきて、夫は病床に臥す、窮乏の情は深く察する所なり。寂しげなる此板屋の二人暮らし、詞遣迄も處なまりに似ず。請ふ君等の來歴を聞くことを得可きか』と、問ふこと再三に及び、婦遂に涙を垂れて、具に其實情を語る。厚唇生耳を傾けて聞き、余も亦愁嘆置く能はず。錢を拂ふて遂に去る（此物語は新體詩樣のものに書きなしたるが有れども長むれば略す）

赤松太郎

茶屋を出て、道を南に取り、渚に沿ふて進むこと二三町、叢爾たる小丘、海を割て突出し、峠上又一小露店有り、三五の馬子荷車引此處に息ふ。丘上には一小祠有り、金比羅宮を祭る。越えて海岸に出て、少まゝ左曲えて田畝の間に入る、前方に當て草屋の間より、突如天を指えたる煙突、團々として黒煙を送るものは、煉瓦製造會社なり。其左方打ちよろほひたる海士の假屋より、かすかに立ち昇はるものは、藻鹽たく煙なる可き。是より又少まゝ右折して、鬱蒼たる二脈相迫するが如き小峽谷に入り、潺々たる川流に沿ふて、東行すること十余町にして、掌大の盆地に出で、右折して其中央を横斷せ、峠に掛る。右回左轉、左回右轉、溪谷の間を縫ふて行くこと、暫時幾多の松杉針然とまて天を刺す蒼たる深谷に入る。一步は一步より急、愈進むに従つて愈險なり。厚唇生問ふて曰く『是夫の有名なる三太郎の一、赤松太郎か』余曰く『然り』と、氏由て憤然杖を提げ、狂奔して登る、余も亦之に従ひ、忽にまて其絶頂に達す。下を俯めば巨松老杉路を左右に擁せ、七折七回龍蛇の蟠

まるが如く、鋭灣深く浸みて。突入牙の如し。厚唇生一休して麵麴を焼かんと請ふ。余由て之を賛
ま、枝を折り葉を蒐めて火を點し、一塊を割て之に投す。厚唇生起て杖を控へて。曰く『老いたる
哉赤松太郎、汝九州三太郎の一と稱ま、肥後の南境を扼して、旅人を惱ますこと此に年有り。今吾
人一起狂奔、息を次かずして七寸の草鞋既に汝の頭上に在り』と。余哄然として笑つて曰く『赤松太
郎何ぞ老いん、夫の所謂眞の赤松太郎は、此餘脈海に没するに當り、再び吼然として勃起する所を
云ふ。然れども明治聖代の治、虎は竹林に伏ま、龍は潭水に眠む。赤松太郎も亦焉んそ永く旅人
を惱ますん彼今秋然として節を折り前非を悔ひ、隱遁えて道を此所赤松太郎に譲る。彼は古英雄、
之は新忠臣、喜んで旅人の草鞋を迎ふるのみ』と。由て大に笑ふ。厚唇生笑ひ亦松太郎も亦笑ふ、
顧みれば火は既に消えて、眞黒の麵麴は淡煙に拂せらる。厚唇生狼狽杖を以て之を路上にはね出し、
地上に摩すること三四回、小刀を以て之を割き、中を穿りて食ふ。惡嗅馬糞の如く、味甚た佳なら
ず。余之を地に抛ちて曰く『しくじつたる哉厚唇生』と。厚唇生得意然として笑つて曰く『是余か最も
好む所なり。と盡く其持つ所を喰ひ、剩さへ余か抛つ所のものを拾ふて之を喰ひ、揚々として坂を
下る。』

佐敷太郎

下れば則ち田浦の宿、宿とは名のみにまて、茅屋三四十、疎に散在したる寂しけなる浦曲にまて、
茶屋と云ふ茶屋も亦殆んどなき。宿を出て、海岸に出て、遙に海上を望めば、天草灘は恣形一變し、
赤松太郎の海に没する所、峭然とまて削るが如く、一二の小島其側に在り、松樹數幹躍如とまて舞

ふが如く、白波相搏ちて泡沫板にかゝるの狀、繪にも書かれぬ有様なり。是より海を離れて山間に入り、一小蕪村に至る頃、天沛然とし霰を降らす。余曰く『晴雨に係らす尙十里を歩するの勇有りや。然らずんば遂に一日三太郎を躍越すること能はず』厚唇生慨然として曰く『三太郎を越えずんば。日は夜に接し、路は二十里を兼ねるも尙は可なり』と余欽然とぞて喜び、生も亦憤然として起つ。遇路傍に一小祠有り、川流其側を流る。余仍て靴を脱ぎて足を水中に投ずれば、冷斷つか如き。斯くの如くすること五分時、足袋を換え、革靴を穿ちて再び進む。兩側の山愈迫まり、人烟稀薄、往來亦絶たり。稍あつて峽は合え、流は斷え、山蒼然とぞて路漸く峻なり。厚唇生曰く『二班以て、全豹を察す可くんば、此嶺も亦知る可きのみ』と余故に黙して云はず。忽にぞて巨岩前に現はる。繞つて左に避くれは、直徑一縷糸を垂れたる如く、道澤滑殆んど行く可からず。余得意とぞて之を攀つれば、厚唇生亦奮て従ふ。喘息奄々奮發大に勉む。余も亦疲れてぞむ。時に天草灘の詩を吟するの聲、朗々として山麓より聞ゆ。俯して之を見れば野叟右肩に棒を擔ひ、左手に繩を提けて、行く行く且つ吟するなり。厚唇生亦之に和して唱ふ。余曰く『山陽先生の勢力も亦大なる哉』と、是より山益險にして道愈惡、五歩に一息十歩に一休して漸く絶頂に達す。仍て岩上に踞え、糖をなめて相語る。厚唇生問ふて曰く『聞く君昨春人吉に到るの途、此嶺を越えたりと、山の峻、道の惡、果して今と相異なるなきか』余喟然として長嘆息して曰く『嗟呼、是余か古戰場なり。山の峻、道の惡、素より何と異ならん。然れども余は其日八代の宿舎に在り、朝餐を喫するに當りて、球磨川、雨水汎濫え、渡舟將に已まんとすとの報に接え(此時迄は未だ橋なかりしが故なり)箸を投して出發せりき。されば田浦に來り之頃は、空腹殆んど忍ぶ能はず、遂に民家に入て神前の御供へ二皿を得たれども、此

峠に掛りたる時は、身體綿の如く、冷汗襟を濕はし、殆んど歩を轉するの力なかりき。剩さへ頭上にをさめたる日記切手葉書等は、帽子と共に吹き上ぐる狂嵐に奪はれ、取り返へす力もなく、漸くにて此處に着せり。頂上に一字の家は有れども戸は閉さえて人はあらず。其あたりに憩ひ居たる牛引の握飯を食するを覓て、垂涎禁する能はず、請ふて空しく笑はれたりき。嗟吁君、旅行の大敵は空腹なり。空腹にして坂を上げる固より難なり。然れども坂を下るは更に難し。余は殆んど如何にぞ佐敷に着きたりしかを怪しむ』と、厚唇生笑つて曰く、『眞面目なる哉言や、見よ、前方遙に眸目の間に横はるものは古甌嶋なり、東海僅かに片影を現はま、將さに匿れんとするものは、天草群嶋に非ずや岬崎突如とぞ。海を割き、嶼嶼沒如として深く嚙む。數百の葦屋櫓の齒の如きは佐敷町なり。帆檣林立蓬芒の連なるが如きは佐敷灣なり。一流の川は蛭蛭として白龍の如く、銀砂渚を繞りて虹の如く、青松一條帶に似たり、帆船沖に行きかひ、淡霞嶋影をかすむ、嗚呼何等の好景とや』余曰く『終に彼の星江先生の所謂『千帆飛鳥散明霞映斜陽』の句を借用せざる可からざるか。夫の左方幾層の山、枯草紅葉赭色を呈する有り。綠羽華黛雲を帯びて浮ぶが如き有り。吾人は實に此八重の山路を辿らざる可からざるなり』と、時已に三時、走せて峠を下り、右折して川口、海に接する所に出で、再び左折して佐敷町に入る。佐敷町は佐敷川を挾める南麓の一小港、川の左岸は片皮町なり。余曰く『其の蕎麥店は余が空腹を擁えて驅け込み、一膳盛と二膳盛とを間違へ、八杯を盡きて店主に笑はれたる處。彼の家は余が宿泊せし所。彼の樓は余が起臥せし所。彼の道を掃ふものは其家の主人なり』と、厚唇生曰く『彼兄を見て更に怪せず、彼は既に兄を忘れたるならんか』余曰く『陽明王守仁も亦嘗て歌ふ逆旅主人多慇懃、出門轉盼成路人と、一夕相見てより年を経ること既

に二歳、彼焉んそ我を識らんや」
戯れて曰く「知るも知らぬも相逢の橋と」、蓋之其門前の橋名を通はせたるなり。

津奈木太郎峠

橋を渡りて一直線に町を東方に行けば、數十人の大工材木を削るを見る。厚唇生問ふて曰く「之より津奈木に到る、程幾何ぞや」曰く「二里」と蓋し五十丁を以て一里となすなり。厚唇生之を知らず、喜んて曰く「易々の事のみ」と、右折して山裾を行く、行く／＼且つ上ばる。稍あつて右折して峠にかゝる。中途警部の来るに逢ふ。余問ふて曰く「日中津奈木太郎を越ゆ可きか」警部問ふて曰く「郷等何處より来る」曰く「今朝熊本を發せり」と、彼愕然色を作して曰く「此峠を越ゆれば、湯の浦の宿有り、得可くんは則ち此處に宿るを以て便となす。津奈木は尙四里に近く。道路峻嶮、日暮るれば則ち行く可からず。殊に近頃屢々強盜を見る」と、余肯せず。由て丁寧に道を教へて別る、登ること二町にして一茅屋有り、其壁に沿ひて白髮敝衣の老翁老嫗、夕陽に面して切りに竹を編む。且つ語り且つ笑ひ、頗る樂々むものゝ如き。又行くこと數町にして嶺に達すれば、狹き山路をきり開きたる小芝庭有り、中央に土表を築く。厚唇生曰く「村社の祭典を行ふ所か」余曰く「此近方家もなく社もなま、恐くは佐敷津奈木兩村の勇士か、雌雄を決する處ならん」と、此處沖の景色、入江の様、木の間がぐれにはの見ていと面白かりければ、又もや松葉を集めて、麵麴を焼き始めたり。厚唇生獨語切りに先の老翁老嫗を嘆す。余も亦竊に同情を寄す。由て書して曰く。

若き戀路に赤糸を、

つなぎ止めてし妹と背が、

あまた夕に白雲の、

かゝる深山に宿めて、

いくよへにけん今も猶、

腰に梓の弓を張り、

頭に霜は置きながら、

額に涙は寄せながら、

ふりし昔の懷をば、

過ぎにし宵の嗜まさを、

語りて出てゝはまかすがに、

包む小袖も破れ衣、

漏るゝ夕日も耻かまゝ、

雨よ霰ももろ共に、

もるや板屋の閨の戸に、

風よ嵐の音たてゝ、

吹くや軒端の夕雀、

羽かひの鳥の睦ましく、

床あたらかく暮すなり。

知るか明日なき命ども、

厚唇生笑つて曰く『牡丹く、君法科生、三百代言の親玉を以て自から氣取る、君又數嶋の道に志すか』。想峰生儼然として曰く『生とま生けるもの法科生たると工科生たるとを問はす何れか歌をよまざる。且た其破格と沒想とは、門外漢とまて、他人の攻撃を避くるの好楯たるを喜ぶのみ』と仍て麵麴を食ひつゝ坂を下り、川に沿ふて上ほること數町にして、湯の浦に來りし時は、日既に沒す。湯の浦は、山間の別世界にして、川を浜はつて五十石の和船を容るゝを得、又溫泉場など有りて、家は少けれども小奇麗なる町なり、湯の浦を出てゝ、道二岐に分る、左すれば大口に出て、右すれば則ち津奈木に行く可し、由て道を右に取り、行くこと里許にまて、少しく左に曲かり、峠に入る、時已に夜に入り人色殆んど辯せず。坂亦頗る峻なり。且つ息ひ且つ行き、已に絶頂と思ふ所に來れば、山は又もや巍然とまて前に横はる。斯くの如くするもの三回にまて嶺を上ぼる。前約有り『津

奈木太郎に登はつて、肥後最後の天地を俯仰せん」と、然れども、天は朦々たる密雲に鎖され、地は
實々たる濃霧に蔽はれ海見えす。嶋見えす。川見えす。又山も見えす。見える處は僅かに近方の樹
木のみ。此に於て落膽一方ならず梢々どまて坂を下れば、左右老杉密に挟み、岩石横佚、水路上を
流れ、石を蹴つて悲鳴すること幾度、つまづきて倒ること幾度、下ること六七町にまて道又左右
に分る。是彼の警部か警告せし所、右は依然たる杉間の石道、右は近頃僅かに開通せし新道之より初
まる。左を行かんか、道險惡加ふるに暗黒にまて屢々緩流に陥る恐有り。右を行かんか、迂回道遠く、
磔露出まて歩行に便ならず。厚唇生曰く『我は斷して又板間の徑道を行かず』と、盖々彼靴を穿たさ
るゝ爲に、足を痛むること甚しければなり。仍て右まて新道を行く。道、羊腸迂廻、一山を廻れば又一
山、三を歩まて一を行かず。常に元來まて方向に歸るの心地す。時に漆黒の密雲は層益重り、底く地を
壓まて迫まり、忽ちにまて大雨嘩々どまて降り四隣暗黒、燈影更に見えず。行くこと一里餘にまて、
二三の小燈チラホラとして微かに樹間より漏るゝを見るのみ。厚唇生曰く『斯くの如くんは終に水
俣に至らん』余曰く『毫も損する所なきなり』と然れども足疲れ腹亦饑えて既に歩くを欲せず。由て
畦を横きつて人家を叩き、津奈木を問ふ曰く『十町に足らず』と、歸りて之を厚唇生に告ぐれば、唯
長大息するのみ。

旅 宿

大に志氣を鼓舞して進む。行けども、更に町らまき所に來らず、唯た時々路傍二三の家、併立せ
る有るのみ。由て再び人家を叩きて之を問へば、津奈木は町に非ず村なり。若し宿を求むるとなら

は、此隣家眞に一個の家ありと此に於て喜悅滿顔其家を訪へば、斯は如何に苦悶悲痛の聲奥の間に聞ゆ、六七歳の小兒、泣きながら悄然柱に倚りてイめり。苦むは母にきて泣くものは子か。余此處に泊めぬかと、問ふこと再三にきて家婦はさも苦まけなる聲にて「宿めたきことは山山なれども急病無人にして意に應ずるを得ず」と云ふ、二人は呆然ときて戸を出てんとすれば十二三歳の娘は、走せなから入り來り、吾等二人の在るを見て一時驚怖きたる有様なりまか、又暫時ありて、少しく涙くみたる聲にて「醫者様は居られず」と云ふ、嗟呼彼も亦彼の家婦の娘なる可し夫たる父はなきや、將た他行せまか、頑是なき世の苦も知らぬいたすら時の花の年頃。嗚呼彼等も亦不幸の子なる哉と、吾少時のことなと思ひ出えて、知らず識らず涙に誘はれたり。斯くてある可きに非されは、宿はど其あたりの駐在所に尋ねたるに、巡查はいと丁寧に宿屋の在る所を教へ、若し其處に泊めずと云はば、如何様とも周旋す可しと云ひたれば、教へられたるが儘に、川を渡つて西方に行くこと三町許、濱と云ふ處に、遂に宿を得たり。宿とは云へ、木賃宿にも稀なるあばら屋にして、門口に二つ三つ摺附木を列へたるは、店のつもりならんか。勝手には大なる爐を切りて、其上には自在鍵に釣られたる鳥の如き土瓶かゝり。男女五四人其周圍に團欒を居れり。靴を脱いで上り、室を尋ねれば、室と云ふはみすばらまき小屏風を以て隔てたる、同き臺所なり。座蒲團は古き疊の表にして、中央には極めて古物らしきねちばやの洋燈をつり油溜の底には、眞黒に塵たまり光も朦朧ときて小燈に優ること遠からず。斯る宿にと思はざるには非されども、兎にも角にも、宿屋を見出したるは何よりの幸にて、先つ待たるものは飯なり。厚唇生は後れながら入り來りしが、宿の主人とは、唯た屏風越のとなれば、まぶくと余が顔を一睨み、啞然と笑ひたるも亦一興。空腹の餘りか、常ならば、見る

もいやなる口欠けたる片瓶一杯の茶は、難なく二三條のわれ目有る、釣鐘なりの茶椀に由りて飲みはされ。片口附の鉢に盛り來りて鯉魚茶の漬物を、物の見事に平げ盡せまは。宿に似つかはま客のそふりと、後よりはさそかま笑はれまならん、暫時有つて、豆腐汁を添へたる膳來り炊き上げの飯は釜ながら運び出されたり。由て兩人は、恰も餓鬼の如く、いやと云ふ迄食食を終はり、其後は唯時々微笑を漏らすのみにて、殊更に談もせず、十二時衾を蒙りて臥したり。寒夜薄衾旅泊の枕、果して心安さか。

玆日瀛車を除きて行程十四里強、宿に着きまは九時を過くこと十五分なりき。

文苑

雨の一夜

夢園

霜月九日。止み難き家の事ありて博多にゆきぬ。去年見し筥崎あたりのなづかまく行きたかりまかど。日も暮れかゝれり。月なき頃は夜のありきもすまじかるべく。只袖の漬あたり浦の景色そこそに見て。停車場前の逆旅に投じぬ。天ぎる雲のあしはやきは。兩どやならん。風どやならんとあやぶまれつゝ寢につきたれど。人車のかしがままきにぞしはしは夢路にも入ること難く。例のはかなき妄想のみ起り來てせんかたなさ。つまらなさ。博多土音の階下にきてゆるは。客ひきの女なるべし。